

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

アルコールと認知障害

松下 幸生，樋口 進（独立法人国立病院機構久里浜アルコール症センター）

長年にわたる大量の飲酒が認知障害と関連することは良く知られた事実であり，特に高齢のアルコール依存症者には物忘れ程度の軽度認知障害から重度の認知症までさまざまな程度の認知障害が高い頻度で合併する。しかし，アルコール依存症に合併する認知症の原因はアルコールによる中枢神経障害のみならず栄養障害，脳血管障害，橋中心性髄鞘崩壊症をはじめとする脱髄性疾患，肝硬変，頭部外傷，糖尿病等と多岐に及んでおり，その臨床像も複雑である。また，アルコールが単独で認知症の原因になるのかという議論は，アルコールそのものが脳損傷の原因となり，いわゆるアルコール性認知症が存在するという主張とアルコール性認知症は燃え尽きたアルコール性コルサコフ症候群であるという主張が対立して決着が得られていない。ここでは，アルコール依存症にみられる認知障害について，全国の専門治療施設に入院するアルコール依存症者を対象とした調査から得られた頻度について報告し，さらに画像所見や

生物学的マーカー等を含めた臨床像について我々のデータを含めてレビューする。また，いわゆるアルコール性認知症は教科書的には reversible dementia とされ，改善する可能性のある認知症とされている。我々の施設では，認知症を合併したアルコール依存症者も治療対象としており，認知機能について少なくとも2回以上評価することにより短期間の断酒による認知機能の変化について検討しており，そこで得られた知見を含めて紹介する。一方，社会の急速な高齢化を反映して認知症が社会問題の一つとなっているが，高齢者の飲酒問題も医療や介護の現場では問題になっている。認知症に合併したアルコール問題については国内外を問わず情報が乏しいが，介護者に大きな負担を負わせることは容易に想像できることである。認知症に合併したアルコール問題についても主に文献をレビューしてここで紹介したい。

（この論文は抄録集より転載しました）